

展示紹介

ロックの蔵書、バスティアの英訳草稿、二月革命のピラ

センターでは、1986年度から定期的に展示を行うことになったが、本年度は「センター日誌」に掲載のように計5回の展示が行われた。それぞれの展示には、「F. B. バスティアの *Sophismes Économiques* の英訳草稿の展示」(24p.)、「経済学古典資料の探索＝アダム・スミスの『国富論』、『道徳感情論』の初版、各版対照」(3p.)、「ジョン・ロック (John Locke) (1632-1704) の書蔵と彼の主著『政府二論』、『人間悟性論』、『教育論』」(13p.)、1848年二月革命とピラ(壁新聞)」(16p.) (以上文責―的場)、「カール・グリユン『フランスとベルギーの社会運動』」(8p.) (文責―専修大学村上俊介) という題で説明資料を付け、見学者に配布した。さてこうした展示の中で特に際だった資料と思えるジョン・ロックの蔵書とみられる Graevius 編の *Suetonius*、バスティアの *Sophismes économiques* の彼自身による英訳、二月革命のピラを紹介することにする。

1) ロックの蔵書

ここに紹介するロックの蔵書とは *Suetonius Tranquillus ex Recensione Iohannis Georgii Trajecti ad Rhenvm. Anno. 1672. (A-B226)* である。Peter Laslett 他編のロック蔵書目録 (*The Library of John Locke*, 1965) には 2805 番として掲載されている。ロックは、1687年3月編者の Gravius 宛に「私は貴方のスエトニウスに関する本をずっと探してきましたが、無駄でした。…もし貴方の本屋にいくつかその本があれば、どうかそれを私のために買って下さい。」と書き送っている (*The Correspondence of J. Locke*, III, p. 145) ので、おそらく彼は直接購入したのではないかと思われる。ロックがグレヴィウスと会った頃、グレヴィウスはユトレヒトの歴史学の教授であった (Bourne, *The Life of John Locke*, London, vol. 2, p. 17)。ロックは 1686年3月10日に彼を訪問している (*Ibid.*, p. 35)。このローマ時代のスエトニウスなる人物であるが、彼は紀元1世紀から2世紀にかけてローマ帝国に暮らした歴史家であった。彼の主著は『皇帝伝』(国原吉之助訳、岩波文庫) であるが、この選集にも収められている。

さて、このスエトニウスの本であるが、これがロックの蔵書であるとは中に書かれたロックの筆跡により明確である。先のロックの蔵書目録によるとこの本はロックによって Edward Clarke に渡されたものとなっている。ロックが本を手に入れたのが手紙から判断して 1687年3月以後だとすると、しかもロンドンへ帰った後だとすると、1689年以後だと言うことになる。そして本の内容から言って受け取った相手はまだ幼かった Ed. Clarke ジュニアであったと思われる。

ロックは、従姉妹のメアリー・ジェップが Ed. Clarke と結婚したため (*Correspondence of Locke and Ed. Clarke*, 1927, p. 8) 彼とは親しい友人となっていた。そのためロンドンに帰った後、ロックは彼の一人息子ジュニアの教育の面倒を見ることになる。1692年ロックのもとにメアリーが、息子の教育についての相談に訪れているが、そのときにこの本を渡した可能性がある。ロックはラテン語の勉強についてグラマースクールの勉強は推薦できないとして (『教育に関する考察』服部知文訳、岩波文庫, p. 254)、まず『イソップ物語』を読み、ラテン語訳と英訳とを一語一語対照しながら書いていくのが最良の勉強法だと述べている (前掲書, p. 256)。そしてその後「ラテン語で書かれた歴史書を渡してやるべきです」(前掲書, p. 288) と言っている。多分スエトニウスの本は

その方針でジュニアに手渡されたものと思われる。

またこのステニウスの本には、小さな断片が挟まっいて、それにはラテン語の文字が書かれている。これはロックの筆跡と言うより、子供が字の練習をした時のノートの断片といった方が良くであろう。ロックは字の練習法について、平素書くものより大きめの字の見本を見つけ、赤インクで印刷し、その上をなぞればよいと言っているが（前掲書、p. 249f）、まさにこの断片の字は大きく彼が習字にあげた文字の例に似ているので子供、おそらくジュニアが練習したものかもしれない。

2) バスティアの英訳草稿

自由貿易論者 F. バスティア (Bastiat) の *Sophismes Économiques*, Guillaumin, Paris, 1846. は、当時かなり反響を呼んだ本であった。初版はたちまち売り切れ、早くも同年に 2 版が出版されるほどであった。当然イギリスで反穀物法の論陣を張っていたコブデンらの目に止まり、イギリスでもこの本の翻訳がポーター (Porter) によって同じ年に発行されることになった (*Popular fallacies regarding general interests*, Murray, London, 1846)。ところがセンターが購入したバスティア自身による英訳草稿に見られるように、彼はポーターの翻訳より前に自ら翻訳の作業を行っていたようである。なぜ彼はこの翻訳の計画を事前に知らなかったのであろうか。おそらく彼が翻訳を完成した時に、ポーターの英訳がロンドンで出版されたため、英訳の出版を断念したと思われる。彼はこの作品がこんなに早く英訳されるとは思っておらず、この英訳は彼にとって突然のことであったと思われる。センターが同時に購入したバスティアの出版者 Guillaumin 宛の 1845 年 10 月 6 日の手紙 (MSS5) を見ても、彼がこの本の 2 版の出版の可能性についてまだ不安であったことが分かり、英訳がロンドンで出版される可能性についてはまったく考えられなかったようである。ところが彼の予想を上回り、英訳だけでなくドイツ語訳 (1848 年)、オランダ語訳 (1847 年)、イタリア語訳 (1847 年) さらにはコロンビアでスペイン語訳 (1847 年) まで出版されることになり (邦訳は 1878 年林正明によって『経済弁妄』として出版された)、自らの英訳の必要性はまったくなくなったわけである。

さてこの英訳であるが、題名はポーターの訳と違って *Social Fallacies* (MSS4) となっている。*Sophismes Économiques* の英訳については、そのほか *Economic sophisms*, Edinburgh, 1873., *Fallacies of protection*, London, New York, 1909., *Sophisms of protectionists*, New York, 1878. *Sophisms of protection policy*, New York, 1848. 等があるが、この *Social Fallacies* という題名も California で 1944 年に一度は出ている。草稿全体はすでに清書原稿であり、綺麗な文字で書かれている。全体で 351 枚あり、一部欠けたところを除けば総て揃っている。欠けたところであるが、それはほとんど後半の結論部分に集中している。ページで言えば、345-353 迄であり、その状態は 345-348 ページのようにほんの一部欠けたものと、349-353 ページのように紙片の上部が破れたものとの二つに分かれる。個々の内容の検討はこれから行わねばならないが、比較的保存状態が良いことからこのマニュスクリプトの翻刻はバスティアの今後の研究にとって意義あるものとなろう。

3) 二月革命のピラ (Les Murailles)

ここでピラと言っているものは、壁に貼られたものという意味で、その範囲はポスター (Affiches)、新聞 (Journaux)、路上で配布されるピラ (Tracts) にまで及ぶ。今回センターの百年記念募金図書購入費で購入したコレクションには、計 122 点のピラが含まれているが、この数は当

時数え切れないほど発行されたビラの数からいって決して多くはない。たとえば、二月革命から3月の選挙公示までのビラを数百点復刻した *Les Murailles révolutionnaires, Paris, 1865*。(以下 M. と略)と比較すると分かるであろう。しかし、二月革命から選挙、6月蜂起、ルイ・ナポレオンの登場に至るまで幅広い範囲を包括している点では、革命全体をしる上での貴重な資料と言えよう。

以下いくつか日付順に見てみることにする。革命時のものとしては国民軍 (*Gardes nationaux*) に反旗を翻すなという命令 (No. 74-ビラの番号) や、臨時政府の国民軍への協力要請 (No. 1)、配給切符制 (No. 12)、*Garnier Pagés* のパリ市長への任命 (No. 75) 等がある。もっとも2月24日のルイ・フィリップ王の退位 (M. p. 20) や、26日の共和制の宣言 (M. p. 34) 等は含まれていない。パリの革命騒ぎは地方にもすぐに伝わったようで、リヨンの共和制賛同の表明のビラもある。(No. 17)。革命後の動きに関しては、印紙税廃止 (No. 77)、労働者への職場復帰の要請 (No. 22)、ストライキの予防 (No. 23) などが興味深い。特に選挙のために各地でクラブや、協会 (*Société*) が結成されたが、その中の *Sociétés des Droits* (No. 120)、*Club de l'égalité* (No. 41)、*Club des Hommes* (No. 49) が会議の日取りを知らせているビラ等は注目すべきであろう。また労働者の失業対策として作られたアトリエ (*Ateliers nationaux*) に関するビラ (No. 55) も見逃すことができない。

二月革命とドイツ人亡命者との関係で興味深いのは、ヘルヴェーク (*Herwegh*) の民主協会のビラである。そこで彼は「我々は、二月革命の崇高な闘争に対するあなたがたの勇気と愛国心の証人でありまして、あなたがたの英雄的先例を学び、あなたがたの連盟国、兄弟国ドイツ共和国を宣言するためにドイツへ行きたいとおもっています」と訴え、不用になった武器を貸与してくれるように請願している。ところが当時パリにいたマルクスは彼らの活動を良く思わず、彼らと自分が一切関係ないことを新聞で発表することになる。

二月革命の動きを大きく変えた5月事件、6月蜂起のビラについては、5月15日の臨時執行委員会の謀反に対する批判 (No. 14) や、カヴェニャック将軍が指揮をとったことや (No. 59)、蜂起鎮圧勝利の宣言 (No. 37) 等がある。12月の大統領選にかけては、ナポレオン派のビラが多いことである。カヴェニャックかナポレオンかというビラ (No. 38) を初め多くはナポレオン礼賛のビラである。もちろん、ルドリュ・ロラン支持のビラ (No. 79) や、ジラルダンを推すビラ (No. 66) などもある。そのほかいわゆるビラとは違う以下の新聞の類も数点含まれている。*Journal des Sans-Culottes* (No. 81)、*Perdu Chêne* (No. 99)、*Pilori* (No. 103)、*Pinto* (No. 104)、*Progrès social* (No. 108)、*Rendigote grise* (No. 114)。

以上、三つの展示資料に付いてやや詳しい内容を書いたが、より詳しい内容については展示の際の前記配布資料を参照されたい。(一橋大学社会科学古典資料センター助手 的場 昭弘)